『古代アメリカ』 12, 2009pp. 65-94

＜論文＞

カンパナユック・ルミとチャビン問題
—チャビン相互作用圏の周縁からの視点—

松本　雄一
（イェール大学大学院）

【要旨】
本稿ではペルー共和国アヤクチョ県ビルカスワマン郡のカンパナユック・ルミ遺跡において筆者が2007年から2008年にかけて行った調査の概略を提示し、同遺跡からの新たなデータに基づいてチャビン問題の再検討を試みる。議論の中心にあるリチャード・バーガーとジョン・リックの論を比較し、カンパナユック・ルミのデータと照合した結果、カンパナユック・ルミとチャビン・デ・ワンタルの関係、さらにその通時的変化は現時点での両者の論から予想されるよりも複雑な歴史的プロセスであることが分かった。また、このような地域間交流を解釈するために援用されることが多い世界システム論が、カンパナユック・ルミとチャビン・デ・ワンタルの関係を論じるために有効か否かを検討する。

【キーワード】
カンパナユック・ルミ、チャビン問題、地域間交流、複雑社会、世界システム論

【目次】

1.　はじめに
2.　調査の経緯
3.　カンパナユック・ルミ発掘調査2007–2008
3–1.　建築
3–2.　土器編年
3–3.　埋葬
3–4.　居住域
3–5.　黒曜石
3–6.　特殊な遺構
3–7.　編年と考察
4.　チャビン問題とカンパナユック・ルミ

4–1.　チャビン・デ・ワンタルをめぐる近年の論争と問題の所在
4–2.　カンパナユック・ルミから見たチャビン問題
5.　地域間交流をめぐる理論的枠組みの再検討
5–1.　地域間交流の理論と世界システム論
5–2.　世界システム論の問題点とカンパナユック・ルミの通時的変化
6.　おわりに

---

1. はじめに

カンパナユック・ルミ（Campanayuq Rumi）遺跡は、ペルー共和国アヤクチョ県ビルカスワマン郡に位置する形成期の祭祀建築である（図1）。2007年10月から2008年6月まで、筆者はユリ・

図1　形成期中期・後期の主要遺跡と黒曜石産地（Burger and Matos 2002より改変）

カベロと共同で同遺跡の発掘調査を行った。この調査によって、カンパナユック・ルミはアンデス中央高地南部で最大の規模をもつ祭祀建築であり、チャビン・デ・ワンタルと密接な関係にあったことが明らかになった［Matsumoto and Cavero 2008, 2009］。この遺跡が位置するペルー中央高地南部は、形成期早期から前期にかけて北部および中央海岸［Burger and Salazar Burger 1991, 2008, 2009; Haas and Creamer 2006; Pozorski and Pozorski 1987, 2002; Shady and Levya eds. 2003］、または中央高地［Grieder et al. 1988; Izumi and Terada 1972; Onuki 1993］で起こった大規模な祭祀建築の出現をともなう大きな社会変化からは取り残されていた。従ってカンパナユック・ルミは地方文化が漸進的な発展を経て出現したものとは考えにくいうえ、隣接する地域にもカンパナユック・ルミに先行するような文化発展の痕跡は見当たらない。アヤクチョを含む中央高地南部においては、形成期の遺跡自体の数がきわめて少ない上、その多くが小規模な居住地か季節ごとに使用されたキャンプのようなものであると考えられている(註1)［ex. MacNeish et al. 1975, 1981; Matos; 1999; Parsons et al. 2000］。

従って中央高地南部におけるカンパナユック・ルミの存在は人類学、考古学、歴史学の間で広く共有される古典的かつ基礎的なテーマを改めて我々に提示している。すなわち、「階層未分化で血族関係中心の組織を数千年以上維持してきた社会が、なぜ、どのようにして階層化をともなうより複雑化した社会組織を選択したか［Burger and Matos 2002: 154］」(註2)という問題である。

本論の目的は3つに分けられる。1つ目は、筆者が2007年から2008年にかけて行ったカンパナユック・ルミ遺跡発掘調査の概略を提示することである。この調査によって出土した大量の遺物の分析は現在も進行中であり、将来的には詳細な記述を加えた発表を行うつもりであるが、本論においては現時点で可能な調査の概説と予備的な考察を提示しておきたい。2つ目は、カンパナユック・ルミのデータが現在議論されている「チャビン問題」とどのように関わるかを考察することである。まず、議論の中心であるリチャード・バーガーとジョン・リックの論を比較した上で問題の所在を明らかにし、カンパナユック・ルミのデータに基づいて両者の論を検討してみたい。3つ目の目的は、カンパナユック・ルミが地域間交流において果たした役割を適切に説明しうる理論的枠組みを検討することである。バーガーとマトスは、アヤクチョの北約150km のワンカベリカに位置するアターリャ遺跡と中央高地のチャビン・デ・ワンタルの関係を考察する際に、ウォーラーステインの世界システム論の援用が有効であると論じた［Burger and Matos 2002］。本論においてはアターリャとカンパナユック・ルミを比較して、バーガーとマトスの論を再検討すると共に、世界システム論がカンパナユック・ルミのデータに対して有効か否かを検証したい。

2. 調査の経緯

カンパナユック・ルミの名が最初に文献に現れたのは、1959年にカルロス・グスマン・ラドロン・デ・ゲバラがサン・マルコス大学に提出した卒業論文においてである［Guzmán Ladrón de Guevara 1959］。彼はカンパナリオ（Campanario）の名でこの遺跡を登録し、表面採集と若干の建築の計測を行った。彼はチャビン的な土器片一点とパラカス的な土器片一点を発見したと報告しつつも、遺跡表面に大量に存在するチャンカ文化のアルハヤ期の土器を理由にこの遺跡を後期中間期に分類している。その後、カンパナユック・ルミは40年以上の間忘れ去られていたが、2002

年に文化庁のペルー文化庁によるカパック・ニャンプロジェクトでビルカスワマンが調査された際に、考古学者ユリ・カベロとウリセス・ラレアによって新たに登録された。カベロとラレアは、測量と小規模な試掘を行い、カンパナユック・ルミの建築がチャビン・デ・ワンタルに類似したU字型の基壇配置を持つこと、さらに典型的なチャビン土器とされるものが出土したことを確認している。筆者は2005年にワマンガ大学教授のホセ・オチョトマからの紹介でユリ・カベロと共に彼が2002年に行った試掘坑出土の土器資料を実見し、それらが典型的なハナバリウ的土器[Burger 1984, 1988, 1992] を含むことを確認した。さらに翌年、筆者は、ユリ・カベロ、リチャード・バーガーと共に同遺跡を訪れ、遺跡表面にハナバリウ的土器及び大量の黒曜石が存在することを確認した。以上の観察から、筆者は同遺跡がチャビン・デ・ワンタルと関係が深い遺跡であり、近隣のキスピシサ鉱山産の黒曜石の遠隔地交易に重要な役割を果たした可能性があるとの仮説のもと(註3)、翌2007年10月から12月、2008年4月から6月の2シーズンの発掘調査をユリ・カベロと共同で行った。

3. カンパナユック・ルミ発掘調査2007−2008

ビルカスワマン村はアヤクチョ市中心部から南東113kmに位置し、インカ期の地方行政センターがあったことで有名である［Gonzales Carré et al 1981, 1997］。カンパナユック・ルミは村の中心からわずか東に600mの農耕地内に位置しており、その標高は約3600mである。気候区分としてはスニとプーナのちょうど境目に対応するため、スニで行われる高地農耕とプーナで行われる牧畜の両方を行うことが可能である。

以下に2007年から2008年に行った調査結果の概略を項目別にまとめた後、本遺跡と密接な関係にあると想定されるチャビン・デ・ワンタル遺跡との関係及びカンパナユック・ルミの地域間交流における位置づけを考察しておきたい。

3−1. 建築

カンパナユック・ルミは北西方向に開いたU字型の基壇配置を有する祭祀建築であり、半地下の中央広場とそれを取り囲むように配置された4つの基壇によって構成される（図2）。半地下式広場の広さは少なくとも30×34m以上に達し、深さは約1.5mである（図3）。U字の頂点に位置する中央基壇は65×50mの広がりをもち、高さは6mから7mと推定される（図4）。U字の腕に相当する2つの基壇（北基壇、南基壇）もほぼ同じ広さを有するが、高さは2mから3mほど中央基壇に比べて低い。以上の3つの基壇に加えて、4つ目の基壇（西基壇）がUを閉じる位置につくられている。いくつかの建築の改変が確認されており、特に中央基壇においては最初の建築以降3度の改変を経て最終的な形態に至ったことが明らかになった。チャビン・デ・ワンタルを想起させる磨かれた切り石で作られた階段が追加された（図2−②，図4）のはこの中で2度目の改変に当たる。全ての建築が同様の改変を経たわけではなく、南基壇ではおそらく改変は1度だけであり、基壇上に一回り小さな低い基壇が追加され、さらに基壇が西側に延長された。これに対して、北基壇では建築の改変は行われなかった可能性がある。建築全体の規模に比べて発掘面積が小さいため確認された全ての改変を層位的に関連付けることはできなかったが、後に述べる土器

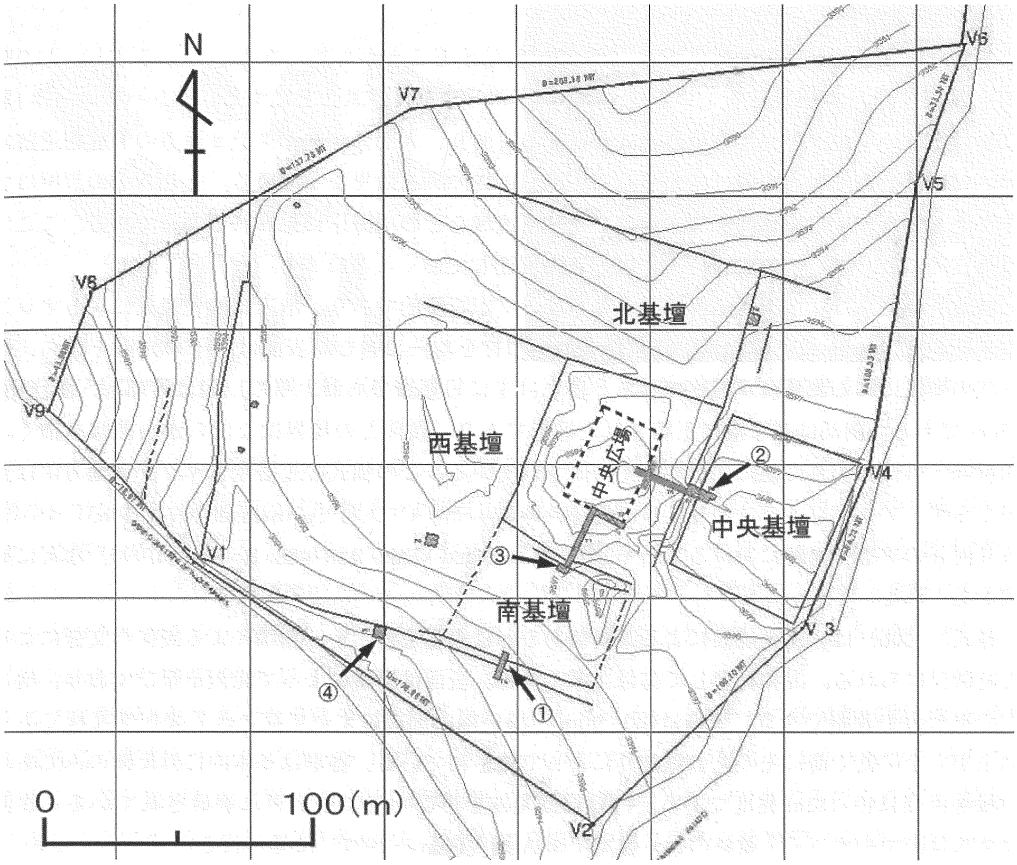

図2　カンパナユック・ルミ遺跡全体図

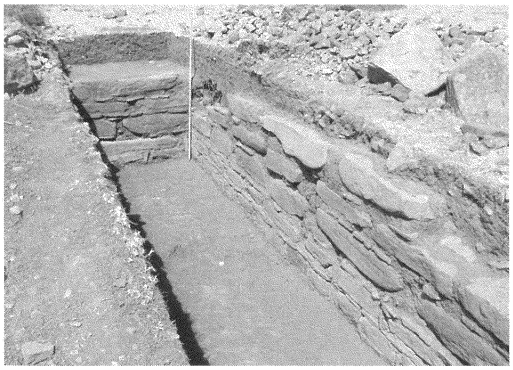

図3　中央広場

図4　中央基壇階段

様式の分析とあわせて考察すると、最初の建築フェイズにおいて、U 字型の基壇配置と中央広場が完成しその後の建築の改変はその様式を踏襲した上での付け足しであるといえる。したがって、建築のためにつぎ込まれた労働力は最初の建築フェイズが最も大きかったと推測される。なお西基壇は未発掘である。

3–2.　土器編年

土器は様式とその層位的関係から、2時期に区分することが可能である。ここでは古い方の時期をカンパナユック1期、新しい方をカンパナユック2期と呼ぶことにする。カンパナユック1期においてはいくつかの異なる土器様式が並存しており、大部分がアヤクチョ地方の形成期遺跡において確認されているもの［Ochatoma 1985a, b, 1992］とは異なっている。むしろその類例はアヤクチョ以南の中央高地南部、またはアカリ河流域などの南海岸に見られるようである。ここでは便宜的に3つの様式（様式1–3）に区分して記述しておくことにする。

様式1（図5）は、帯状の貼付文と赤色スリップが特徴的であり、胎土は酸化焼成によるオレンジ色を呈し、1mm 以下の雲母、長石などの混和材を均一に含む。表面は若干の光沢を持ち、へら状の道具による調整痕が観察できる。器形は主に短頸壺であり、その口縁は外傾し、直径16–23cm である。胴部は若干縦に圧縮された球形であり、頸部との境界はなだらかな曲線を描く。口唇部は外側に切れ、他に比べて良く磨研されている。この様式の土器はアヤクチョ地方には見当たらず、アンダワイラスのワイワカ遺跡、ムユ・モコ C–D 期［Grossman 1972, 1983］や、アカリ河谷のアチャ遺跡におけるアチャ2期［Riddell and Valdéz 1987–88; Robinson 1994］などに類例が見られる。

様式2（図6）は、還元焼成による茶褐色あるいは黒褐色の胎土、刻線による幾何学文様によって特徴付けられる。混和材として雲母を多く含む。表面は磨研によって光沢を帯びており、横方向の整形痕が確認できる。装飾は幅3–5mm の浅い幅広刻線によって描かれる幾何学文様であり、粘土が完全に乾く前に先の丸い施文具によって施されている。器形は基本的に外反鉢のみであり、口縁部直径は13–18cm 程度である。口唇部は丸みを帯びた形に整形され磨研されている。類例はクスコのマルカバイェ遺跡のマルカバイェ A 期［Chavéz 1977］に見られる。

様式3（図7）は、基本的に装飾技法によって他から区分される。黄土色あるいは薄いオレンジ色と赤色スリップの2色の対比によって装飾が施されている。2色の境界は刻線で仕切られていることが多く、比較的単純な幾何学文様を描いているようである。表面は滑らかに平滑化されており、光沢を持つものも多い。胎土は比較的コンパクトで全体にオレンジ色を呈し、細かい雲母や長石などの混和材を均一に含む。器形は、短頸壺、半球鉢、コップ型などのバリエーションを持つ。鉢の中には器壁内側に装飾が施されているものも多い。2色の対比以外に付随する装飾とし

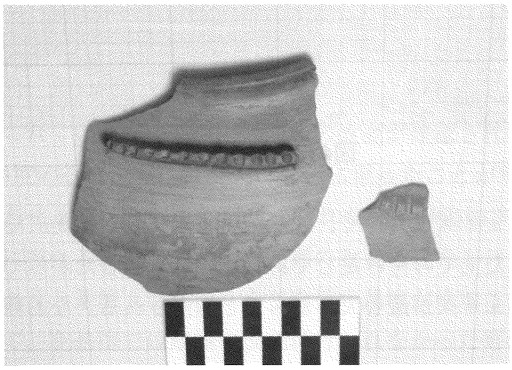

図5　カンパナユック1期土器（様式1）

図6　カンパナユック1期土器（様式2）

図7カンパナユック1期土器（様式3）

図8　カンパナユック2期土器（様式1）

て半球形の貼付文、刻線によって区切られた区画内への短刻線や刺突文の充填が上げられる。類例は、マンターロ川流域のピルワプキオ期［Browman　1970］　に存在し、さらに中央海岸アンコン遺跡のフェイズ4–6［Rosas La Noire 2007］、あるいはアンコンC期［Matos 1968］にも2色の塗りわけによる装飾が確認されている。また、ワヤガ川上流域に位置するシヤコト遺跡においてもシヤコト・コトシュ期に対応する層位から同様の技法を伴う土器が少なくとも1点出土している［Izumi et al. 1972: Plate 29–1］。

ここに類例としてあげた遺跡のうちワイワカ、マルカバイェ、アチャの各遺跡に関しては絶対年代資料が存在している［Chavéz 1977; Grossman 1983; Robinson 1994］。このうちカンパナユック出土土器と類似した土器との対応関係が明確なのはマルカバイェの2点のみであり(註4)、質量共に決して良好なデータとは言えないが、大まかに形成期中期半ばから後半(註5)の時期（1100–900 cal. B.C.）に位置しているといえる。おそらくはカンパナユック1期もその時期に対応しているのであろう(註6)。

カンパナユック2期は、土器様式が大きく変化する。この時期は、おそらくチャビン・デ・ワンタルにおけるハナバリウ相［Burger 1984, 1988, 1992］に対応し、2つの様式（様式1–2）がカンパナユック1期の土器様式に取って代わる。この時期には、鐙型ボトル、口唇部が外切れの外反鉢、橋状把手付注口土器など、多くの新たな器形が登場するが、それらは後述する2つの様式の間で共有されており、両者の違いは主に装飾技法にある。様式1（図8）は、チャビン・デ・ワンタルの影響を強く受けており、多くの土器が金属的な光沢の磨研を有し、ロッカースタンピング、刺突付貼付文、円形スタンプ文などが装飾として施される。装飾のモチーフも刻線による幾何学文様のみであった前時期に比べて大きくそのバリエーションが増加し、磨線によってジャガーや鳥などのチャビン・デ・ワンタルに見られる宗教的な図像表現を表現したものがあらわれる。これに対して様式2は南海岸の前期パラカス様式（Menzel et al. 1964）との類似性が顕著である。器形お呼び装飾のモチーフを様式1と共有しつつも、装飾は主に器壁表面への焼成後の顔料充填及び、ネガティヴ彩文によってなされている。これらの技法はロッカースタンピングや貼付文といった様式1に多く見られる技法と一つの器の中で組み合わされる例はないようである。様式2（図9–10）はメンゼル、ロウ、ドーソンの編年（1964）におけるオクカへ3–4期に対応するようである。バーガー（1988）はこの時期の南海岸の土器を「ハナバリウ的土器（Janabarriu Related

図9　カンパナユック2期土器（様式2）（1）

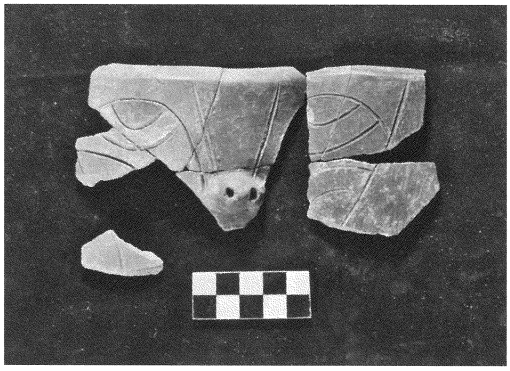

図10　カンパナユック2期土器（様式2）（2）

Pottery)」の一つとみなしており、様式1と2の編年上の関係は地域間レベルでも確認できる。後述するようにハナバリウ的土器の出現時期は現在論争の的であるためカンパナユック2期の年代は絶対年代資料の蓄積を待たねばならないが、ここでは大まかに形成期後期と位置づけておくことにする。

3–3.　埋葬

11の埋葬が確認された。中でも重要なのは、カンパナユック1期に神殿を建築する前に中央広場と南基壇の中間地点で行われた埋葬（TM–5–7、図11）及び、カンパナユック2期における建築の改変に際して南基壇上に新たな小基壇が作られた時に行われた埋葬（TM–2）である（図2－③）。前者は一つの層位に対応した3つの埋葬から構成されるが、発掘トレンチの断面観察からは、少なくとも2つ以上の埋葬が発掘区の外側に広がっていることがうかがえる。人骨の性別及び年齢の同定結果はまだ明らかになっていないが、発掘された3つの埋葬のうち2つは成人の屈葬であり（TM–5,6）、最も北側に位置する1つは、小児の頭骨のみの埋葬（TM–7）である。TM–7においては横向きに置かれた頭骨の上に平石がのせられている。これらの埋葬は全てほぼ同時に行われたものと考えられる。おそらくは神殿を建築するに際しての儀礼の一部だったのであろう。後者（TM–2）は、カンパナユック南基壇上のカンパナユック1期の床面を壊して墓穴を掘り込んでいたと考えられる（図2－③）。北側に顔を向けた横向きの屈葬であり、3つの完形土器が副葬品として出土した（図12–14）。1つ目（図12）は、把手と大きく広がった口縁を持つコップ型土器であり、動物表象が描かれている、2つ目（図13）は、注ぎ口のついたやはりこれもコップ型土器である。刻線によってチャビン・デ・ワンタルとの関係を示唆するジャガーの目が描かれ、白と赤の顔料が焼成後に充填されている。チャビン・デ・ワンタル的な図像表現と南海岸のパラカス前期的な技法が組み合わせられているといえよう。3つ目（図14）は橋状把手付注口壺であり、胴部を胴体に見立てた人型を表している。その人物は顔に文様が描かれており、さらに耳飾りをつけている。また胴部の上のほうには圏点文が列状に配置され、服の模様を表している。本来は髪の結い上げを表す突起が頭上についていたと思われるが、その部分は埋葬の前に破損し失われていたようである。橋状把手付注口壺は南海岸的な要素と思われるが、そこにチャビン・デ・ワンタルにおけるハナバリウ相と対応する口縁の形状、圏点文、磨研等の要素が組み

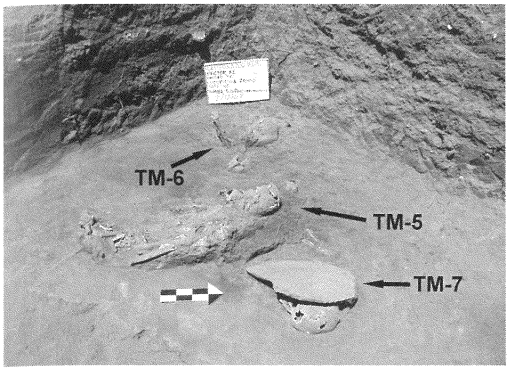

図11　カンパナユック1期埋葬（TM−5, 6, 7）

図12　TM−2出土土器（1）

図13　TM−2出土土器（2）

図14　TM−2出土土器（3）

合わせられている。南基壇上に新たな小基壇を建築する際に行われた儀礼的な埋葬であろうと考えられる。特に2つ目の埋葬から出土した3点の完形土器はいずれも先に述べたカンパナユック2期の土器に分類可能であり、土器の変化と建築の変化が明確に対応していることを示している。

3–4.　居住域

祭祀建築の南北に2つ、合計で11ヘクタールに及ぶ居住域が確認された。祭祀建築の南側に位置する居住域からは、住居址と思われる直径4m前後の円形の石列が確認された。この建築は中央高地南部における形成期建築のパターンには当てはまるが［Burger and Matos 2002; Ochatoma 1985a, 1998; Ravines1969–70］、チャビン・デ・ワンタルの方形の部屋状構造を持つ居住域の建築とは大きく異なる［Burger 1984］。表採及び出土土器はこれらの居住域がカンパナユック1期と2期を通じて利用されていたことを示している。

3–5.　黒曜石

全時期を通じて大量の黒曜石が出土した。全体数のカウントはまだ行っていないものの、打製石器に使用される石材における黒曜石の割合は、カンパナユック2期で増加するようである。将来的には蛍光X線分析による黒曜石の産地同定を行う予定である。

3–6.　特殊な遺構

南基壇の外側を発掘中に回廊と思われる遺構があらわれた（図2－①、図15–16）。その入口は縦120cm 横80cm であり、床は土を固めたのみである。内部は若干曲がりながら東に向かっているが、6m ほど進んだところで天井が崩落しており、それ以上発掘をすすめることはできなかった。対応する土器はこの建築がカンパナユック1期に作られ、カンパナユック2期の終わりまで継続して使用されていたことを示している。

儀礼後の廃棄物を集積したと思われるコンテクストが南基壇の西拡張部そば（P–2）で確認された（図2－④）。大量の炭化物、動物骨、黒曜石片に加え、金製品（図17）、装飾つきの骨製ピン（図18）、投槍器、幻覚剤の吸引する為のスプーンとパレット（図19）、黒曜石の完形ポイント（図20）、土偶、耳飾りなどが出土しており、幻覚剤、饗宴、狩猟などが祭祀儀礼と結びついていた可能性を示唆している。また、このコンテクストから出土した遺物のうち、金製品（図11）と骨製のピン（図12）はチャビン・デ・ワンタルから直接持ち込まれた可能性がある。金製品は蛇の図像が打ち出し細工で表現されており、もともとは大きな胸飾りか耳飾りの一部であったものと推定される。また、人の頭部が彫刻された骨製のピンは、ほぼ同一といってよいほど類似したものがチャビン・デ・ワンタルのオフレンダス回廊から出土しており［Lumbreras 1993: LAMINA 89］、今のところ他に出土例はない。このコンテクスト自体はカンパナユック2期に属していると

図15　回廊入り口

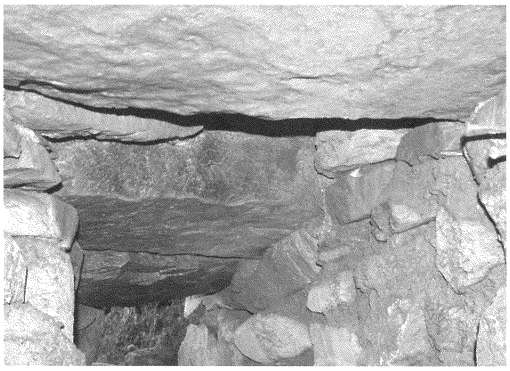

図16　回廊内部

図17　P–2出土金製品

図18　P–2出土骨角器（1）

図19　P−2出土骨角器（2）

図20　P−2出土黒曜石製ポイント

考えられ、ハナバリウ的土器とパラカス前期的な土器が大量に出土している。鐙型ボトルの破片など、他の発掘区で出土しない器形が多く出土し、その他の土器片も装飾を持つものが多くその質も高いように思われる。

3–7.　編年と考察

前述の通り、土器様式に基づいて2つの時期区分が設定することができたが、ここではまず大まかな建築の変化とこの時期区分の対応関係を示しておきたい。まず、中央基壇、北基壇、南基壇、中央広場のいずれにおいても、その最初の建築活動に対応する層から出土するのはカンパナユック1期の土器であり、この時期にU字型の基壇配置と中央広場を持つ祭祀建築が建造されたと考えられる。基壇内の回廊（ギャラリー）の存在（図2−①，図15–16）、石組みの様式などにもチャビン・デ・ワンタルの影響がうかがえる。ただし、先にも述べた通り土器様式からは、チャビンとの類似性はほとんど見られず、中央高地南部及び南海岸との県警を示唆している。

これに対して、カンパナユック2期の建築活動は基本的なU字型の基壇配置を維持した上での改変に留まっているといえる。この時期に中央基壇においてはチャビン・デ・ワンタルを想起させる磨かれた切り石で作られた階段が追加され（図2−②，図4）、南基壇上には小基壇が配置された。さらに南基壇は西側に延長されたと考えられる。前述の通り、土器様式はカンパナユック1期から大きく変化しており、ハナバリウ的土器［Burger 1984, 1988］（図8）と南海岸の前期パラカス的な土器［Menzel et al. 1964; Reindel and Isla 2008; Silverman 2009］（図9–10）が出現する。それにともなって前時期のアヤクチョ以南の中央高地南部との関係を示唆する土器は姿を消す。カンパナユック2期の層の上からはアヤクチョにおける後期中間期に対応するチャンカ期の遺物が出土していることから、カンパナユック・ルミはおそらくカンパナユック2期すなわち形成期後期の終わりに放棄されたと考えられる。

以上のように、カンパナユック・ルミの調査はこの遺跡が約600km北に位置する大祭祀センター、チャビン・デ・ワンタルと密接な関係にあったことを示唆している。チャビン・デ・ワンタルを除くと、カンパナユック・ルミは、石造の建築、U字型の基壇配置さらに回廊の全ての要素を有する現時点で唯一の事例であるといってよい。ここで両者の関係を考察する際の重要なポイントが黒曜石である。質の高い黒曜石が大量に出土していることはカンパナユック・ルミがそ

の採掘と流通において重要な位置を占めていた可能性を示唆しているのであろう。先に述べた通り将来的には蛍光X線分析による産地同定を行うことを予定しているが、現在分かっている遺跡の位置自体からもこの論を支持することができよう。カンパナユック・ルミは形成期で最も重要な黒曜石産地であるキスピシサから約100kmの近距離に位置しており、これは現時点で知られている形成期の祭祀センターの中では最短距離であり、かつバーガーが論じたチャビン相互作用圏［Burger 1993, 2008: 699］の南端に位置していることになるのである。さらに他の多くの中央高地南部の他の黒曜石の産地からの距離も比較的近いといえる。またこの遺跡が位置するビルカスワマン自体が、インカ期には重要な行政センターが位置する交通の要衝であったことも［Gonzales Carré et al 1981］、形成期の地域間交流におけるカンパナユック・ルミの役割を考える上で示唆的であるといえよう。

4. チャビン問題とカンパナユック・ルミ

アンデス考古学において、チャビン問題は半世紀以上もの間中心的な課題の一つであり続けている。テーヨ［Tello 1943, 1960］とラルコ・オイレ［Larco Hoyle 1941］に始まるその学説史的な総括は本稿の扱う範疇を大幅に超えるため割愛し、ここでは近年のチャビン・デ・ワンタル遺跡をめぐる議論の中心となっているリチャード・バーガーの研究とジョン・リック率いるスタンフォード大学の調査隊の近年の成果を比較検討することでチャビン・デ・ワンタルをめぐる問題の所在を明確にすることに主眼を置く。その上でカンパナユック・ルミのデータが両者の議論にどのように関わってくるかを検討したい。

4–1. チャビン・デ・ワンタルをめぐる近年の論争と問題の所在

リチャード・バーガーは、1975年から76年にかけて、チャビン・デ・ワンタル遺跡において神殿から離れた住居址において発掘調査を行い、初めて層位と土器様式を対応させた編年を提示した。バーガーはこの調査に基づいてウラバリウ相（850–460 B.C.）、チャキナニ相（460–390 B.C.）、ハナバリウ相（390–200 B.C.）の3時期の編年を提唱している［Burger 1981, 1984］(註7)。ただし、バーガーは近年他の形成期遺跡における絶対年代データの蓄積と年代補正の必要性を加味してウラバリウ相（1000–800 cal. B.C.）、チャキナニ相（800–700 cal. B.C.）、ハナバリウ相（700–300 cal. B.C.）の年代設定がより適切であろうと考えている［Burger n.d.］。バーガーによれば、ハナバリウ相に対応する時期に汎地域的な広い範囲で一つの土器様式が広まり、祭祀建築が大型化する。この現象は冶金、石材加工、土木、織物等の様々な技術革新をともなっており、それらが図像などを運ぶ媒体ともなった。さらに時期を同じくしてチャビン・デ・ワンタルを中心とした巡礼システムが確立し、それによって地域間交流が加速した。バーガーはこれらの要因が複合的に結びつくことによりチャビン・デ・ワンタルの宗教的なイデオロギー（チャビン・カルト）が各地に広まり、階層化に代表される大きな社会変化が対応して起こったと考えている［Burger 1988, 1992, 1993, 2008］。また彼は、ワンカベリカの辰砂、エクアドル沿岸のスポンディルス貝、そしてキスピシサ産の黒曜石など、希少材の遠隔地交易の活発化もこの宗教ネットワークの形成と深く関係しており、アターリャなどの特定資源の産地と密接な関わりをもつセンターの成立を促し

たという説も提示している［Burger and Glascock 2000, 2002; Burger and Matos 2002］。

現在チャビン・デ・ワンタルにおいては、ジョン・リック率いるスタンフォード大学の調査団が1994年から調査を行っており、主に建築の変遷と絶対年代に関する新たなデータを発表している［Kembel 2001, 2008; Kembel and Rick 2004; Rick 2005, 2008］。彼らのデータは、チャビン・デ・ワンタルの建築プロセスが従来考えられてきたよりもはるかに複雑であったことを示唆している。さらに重要なのは、ジョン・リックとシルビア・ケンベルがチャビン・デ・ワンタルの編年上の位置づけと他センターとの関係に関してバーガーの論と大きく異なる新たな解釈を提示している点である。彼らによれば、チャビン・デ・ワンタルの歴史は、ウラバリウ相の開始時期である1000–900 cal. B.C.ではなく、1500–1200 cal. B.C.［Rick 2005: 75］のセパレートマウンドステージ（Separate Mound Stage）にさかのぼり［Kembel 2001, 2008］、その建築が最後に更新されたのはハナバリウ相に対応する500–400 cal. B.C.ではなく900–780 cal. B.C.であるという。

両者の論におけるチャビン・デ・ワンタルの編年上の位置づけの違いは、単なる1遺跡の編年の問題に留まらず、中央アンデスにいつ、どのようにして文明社会が成立したかという形成期における主要テーマに密接に関わっている。バーガーによれば、チャビン・デ・ワンタルは1000 cal. B.C.頃、ウラバリウ相の始まりに、傑出した祭祀センターとして成立した。チャビン・デ・ワンタルがそれまでに存在した他の祭祀センターと大きく異なる点は、同遺跡が先行する各地のセンターの図像表現や建築スタイル等、様々な要素を「発想の源（source of inspiration）」として取り込み統合した上で成立したという点である［Burger and Salazar–Burger 2008］。従って、北海岸クピスニケ文化［Elera 1993, 1998］、中央海岸マンチャイ文化［Burger and Salazar–Burger 2008］、さらにアンデス東斜面の神話体系［Lathrap 1973; Roe 1982］などの要素が複雑に絡み合ってチャビン・カルトが形成され、それがハナバリウ相において汎地域的な宗教イデオロギーとなって地域間交流のネットワークを形成することになる［Burger 1988, 1992, 1993］。

これに対して、リックとケンベルはチャビン・デ・ワンタルが形成期前期の後半に、クピスニケ文化やマンチャイ文化の祭祀センターとほぼ同時期に出現し、形成期中期を通じて並行して発展したと考えている［Kembel and Rick 2004, Rick 2005］。彼らの論においては、チャビン・デ・ワンタルと他地域の祭祀センターで共有される様々な要素は、先行文化の統合ではなく、両者が長い期間を通じて相互に交流し続けたことの結果として現れたものということになる。また彼らは、バーガーの論のもう一つの重要な点、すなわち形成期後期後半における（500 cal. B.C.頃）の汎地域的な宗教イデオロギーの拡散を否定している。彼らによればチャビン・デ・ワンタルは500 cal. B.C.頃に、祭祀センターとしての機能を失ったという。つまり、バーガーが論じたような宗教ネットワークの形成、技術革新、社会変化等はこの時期に起こらず、ハナバリウ的土器の出現は、チャビン・デ・ワンタルが祭祀センターとして機能しなくなってからの現象であるという解釈である［Kembel 2001; Kembel and Rick 2004; Rick 2005］。しかし、最新の出版物において彼らはその立場を大きく変化させ、ハナバリウ的土器に対応する年代を800 cal. B.C.に変更し、彼らの建築上の編年におけるブラックアンドホワイトポータルステージ（Black and White Portal Stage）に対応させている［Kembel 2008; Mesia 2007］。ただし、この変更が地域間交流レベルの視点で彼らの従来の論とどのように関わるのかはいまだ示されてはいない。

従って、現時点ではバーガーの論とリック／ケンベルの論と間には3つの編年上の食い違いが

存在している。第1点はチャビン・デ・ワンタルが出現した年代、第2点はハナバリウ相の年代、第3点はチャビン・デ・ワンタルが祭祀センターとしての機能を停止した年代である。しかしこの時期の年代測定にはいくつかの困難が付きまとう。まずチャビン・デ・ワンタルにおいて往々にして年代測定のための良好なコンテクストを得ることが難しいことが挙げられる。過去の調査において、祭祀建築の変遷と土器様式の直接の対応関係に基づいて良好な遺跡編年を確立することができた例は実質上存在しない。これはバーガーにもリック／ケンベルにも共通する問題点ではあるが、方法論というよりはチャビン・デ・ワンタルの遺跡としての特徴に起因する点が大きい。複雑な建築プロセスによって繰り返された土層の撹乱に加え、2つの川の合流点近くに位置することで生じる分厚い沖積層の堆積、1945年に起こったような地滑りなどによって、建築、層位、土器様式を関連付けることが困難なのだと推測される［ex. Burger n.d.; Burger and Salazar–Burger 2008; Mesia 2007］。さらに形成期後期は絶対年代の測定に関しても不運といわざるをえない面がある。800–400 cal. B.C.は、ハルスタット・プラトー（Hallstatt Plateau）と呼ばれる、ちょうど補正曲線がほぼ水平になってしまう時期に対応するため［Becker and Kromer 1993; Van der plicht 2004］、1シグマの偏差であっても暦年代が400年以上もの幅を持ってしまう［Leon　2007］。先に述べたバーガーとリック／ケンベルの間の3つの違いのうち、2つまでもがこの年代幅の中での解釈の相違であり、そのことが編年問題の解決を妨げている。

4–2.　カンパナユック・ルミから見たチャビン問題

現時点では、カンパナユック・ルミ遺跡の絶対年代データが得られていないため確定的なことを論じるのは不可能であるが、ここで一度、バーガーとリック／ケンベルの議論をカンパナユック・ルミのデータを通して検討し、今後の見通しを考えてみたい。カンパナユック・ルミが出現した正確な時期は不明であるが、カンパナユック2期がハナバリウ相対応であることは確実であるためカンパナユック1期はウラバリウ相あるいはチャキナニ相と同時期であることになる。いずれにせよ、カンパナユック・ルミはカンパナユック1期にU字型の基壇配置を有する祭祀センターとして突然出現したようである。大きな居住域がカンパナユック1期から存在していたことを考えると、祭祀センターとそれを支える社会はこの時期に同時に出現したものと考えられる。先述の通りカンパナユック・ルミ遺跡においては、形成期を通じて中央基壇で4回、南基壇で2回の建築の改変が確認されている。ただし基本的なU字の基壇配置はカンパナユック1期に属する最初の建築フェイズで確立されており、その後の改変は部分的なものであるといってよい。U字の基壇配置と中央広場、方形の割り石と平石を組み合わせた石組みの様式、基壇内部の回廊などはカンパナユック1期の最初の段階で比較的短期間に大量の労働力を注ぎ込むことで完成したと考えられる。いずれの要素もチャビン・デ・ワンタルの建築の詳細な知識なしに再現することは困難であるため、カンパナユック・ルミはチャビン・デ・ワンタルの直接的な影響下において、ハナバリウ相以前に成立したことになる。従って、リック／ケンベルの論にある、チャビン・デ・ワンタルと時期を同じくして成立し、共に発展したという図式はこの場合受け入れがたい。また、チャビン・デ・ワンタルの影響下において急激な変化として成立したという点では、バーガーの論に当てはまるとも言えるが、その出現は明らかにハナバリウ相に対応する時期の前である(註8)。

カンパナユック2期は、建築活動は1期ほどの規模ではないものの、土器様式の急激な変化、社会の階層化を示唆する遺物の出現、儀礼コンテクストの存在など、大きな社会的・経済的変化が起こったことが推測される。土器はハナバリウ的土器が大きな割合を占めるようになり、金製品の出土、黒曜石の増加など、バーガーが想定しているハナバリウ相とチャビン・カルトの拡散におおむね対応しているといえる。従ってこの場合、リック／ケンベルが論じたように、ハナバリウ相およびそれに伴って各地で見られる土器様式の変化などの現象がチャビン・デ・ワンタルの機能停止後に起こったとする解釈［Kembel 2001; Kembel and Rick 2004; Rick 2005］は成り立たないであろう。カンパナユック2期は神殿が更新されていた時期であり儀礼活動も活発であったと考えられるし、チャビン・デ・ワンタルとの関係を示す様々な遺物が出土している。また祭祀センターとしての機能を停止したチャビン・デ・ワンタルがカンパナユック・ルミに対して社会変化を引き起こすほどの強い影響力を持ったとも考えにくい。先に述べた通り、ケンベルはごく最近の論考において、調査隊の同僚であるクリスチャン・メシーアのワチェクサ区における調査結果を元に、ハナバリウ相の年代が800 cal. B.C.頃までさかのぼる可能性を示唆している［Kembel 2008: 69, 72–73; Mesia 2007］。但し、この変更に対応したハナバリウ相と同時期の各地の祭祀センターの関係についての新たな解釈は提示されていない。これに関しては近い将来、カンパナユック・ルミの絶対年代資料が蓄積されるのを待ってもう一度論じることとしたい。

5. 地域間交流をめぐる理論的枠組みの再検討

アンデス考古学においては、各河谷や盆地を一つの調査単位として、セトルメント・パターンを軸とした包括的な研究を行うというスタイルが多いためか［ex. Billman 1996, 1999; Pozorski 1987; Wilson 1988］、汎アンデス的なレベルでの域間交流を解釈するための理論的枠組みを模索する試みはそれほど盛んではない。しかし、カンパナユック・ルミとチャビン・デ・ワンタル、そしてチャビン相互作用圏の関係のように、地域間交流とそれに関係した複雑社会（complex society）の出現を考察するには、一地域を単位とする分析手法は明らかに不十分であり、距離の離れた政体間の関係を、政治、経済、宗教イデオロギーなどのあらゆる側面から通時的に考察する必要がある。この点で、バーガーとマトス［Burger and Matos 2002］が、カンパナユックと同じ中央高地南部に位置するアターリャ遺跡をとりあげ、同遺跡とチャビン・デ・ワンタルの関係を解釈するためにウォーラーステインの世界システム論を援用したことは非常に興味深い。ここでは、これまで使われてきた地域間交流の理論的枠組みを概観し、特に世界システム論がカンパナユック・ルミを論じるために有効か否かを検討してみたい。

5–1. 地域間交流の理論と世界システム論

カンパナユック・ルミは、アンデス中央高地南部における複雑社会の発生とその社会経済的変容を通時的に考察することができる数少ない遺跡である。また、同遺跡はチャビン・デ・ワンタルの強い影響のもとに出現し、おそらくはその崩壊と時期を同じくして祭祀センターとしての機能を停止したと考えられる。従って、地域間交流と複雑社会の間の相互作用をその発生から崩壊に至るまでの歴史的プロセスとしてとらえることが可能である。すなわち、以下の3点が主要な

問題点となる。

1) なぜ、またはどのようにして、階層未分化の地縁あるいは血縁に基づいた社会組織が、より複雑化の進んだチャビン・デ・ワンタルのような遠隔地の社会との経済及びイデオロギー的な面での接触を経て、階層化を含む複雑社会へと移行したのか。
2) カンパナユック・ルミが祭祀センターとして出現する際に新たに取り入れられた社会システム、つまり大規模な建築活動及び遠隔地間の交流を維持することを可能にする社会の組織化、はどのようなものであり、その後どのように変化したのか。
3) 地域間交流によってそこに含まれる各社会がどのように変容していったのか。

これらの点は、学史上における二次的国家（secondary states）をめぐる考察［Price 1978; Parkinson and Galaty 2007］と問題意識を共有していると言える。なぜならカンパナユック・ルミは、チャビン・デ・ワンタルという‘一次的な（primary）’複雑社会との接触を経て出現した‘二次的な（secondary）’複雑社会だからである。パーキンソンとガラティが述べている通り［Parkinson and Galaty 2007］、二次的国家の発生とその発展に関しては、‘二次的’という言葉がネガティヴなイメージを持ってしまうことと、より重要とされる‘一次的’国家について研究が集中してしまうことがあり、十分な理論的枠組みの構築が行われてこなかった。カンパナユック・ルミとチャビン・デ・ワンタルの関係を論じる際にも同様の問題が付きまとうため、十分な考察なしに既存の枠組みを両者の関係に当てはめて解釈することはきわめて危険であるといわざるをえない。

多くの人類学者と考古学者にとって、文化接触とそれに伴う社会変化は重要なテーマであり続けている［ex. Cusick ed.1998］。特に考古学者は、地域間交流が複雑社会の成立と発展の理由の一つであると考えてきており、文化変容理論（acculturation theory）がその初期において主流を占めていた。このアプローチは一方の文化の優位性を強調するものであり、必然的に優位な側から他方への一方的なプロセスを想定してしまうことになる点が問題であった［ex. Spicer 1961］。近年は、より相互作用に重点を置いて、地域間交流と文化接触の動態をとらえようとする試みへと問題意識が移行しており、「接触した文化の間でのモザイクおよびシンクレティズムの生成、あるいは文化の再公式化［Scaramelli and Tarble de Scaramelli 2005: 136–137］」(註9)が強調される傾向にあるといえる。このような学史上の文脈において、考古学者は様々な理論的枠組みを模索してきた。相互作用圏（interaction sphere）［ex. Caldwell 1964; MacNeish et al. 1975］、同等政体間における相互作用論（peer polity interaction）［Renfrew 1986］、世界システム論（world systems theory）［ex. Blanton and Feinman 1984; Chase–Dunn and Hall 1997; Kohl 1987; Schneider 1977; Wallerstein 1974］、ソーシャル・フィールド［Wolf 1984; Kohl 2008］、グローバリゼーション［Pitts 2008］などが例として挙げられよう。なかでも世界システム論は90年代以降、非常にポピュラーな説明概念であった。

しかし、世界システム論の先史時代に適用する試みは、ウォーラーステイン自身が否定的な見解を示したこともあって［Wallerstein 1993］、常に論争の的となってきた。それにも関わらず、現在にいたるまで考古学者によって修正、援用のプロセスが繰り返されている［Kardulias and Hall 2008］のは、世界システム論が、地域的に離れた社会の間での資源の開発と流通を、中央

(core) と周縁 (periphery) の非対称な関係を強調しつつ解釈するのに適していたためである。つまり、地域間交流を考える際に、中央を階層化が確立された社会と設定し、周縁を階層未分化な社会とした上で、中央のエリート層の利益という視点で周縁から中央への物流、さらに周縁の社会変化を解釈することができたわけである [ex. Schneider 1977; Peregrine 1991]。

アンデス考古学における世界システム論の援用例はそれほど多くはないが、代表的な例と言えるバーガーとマトスによるアターリャに関する考察 [Burger and Matos 2002] も、基本的にはこの延長線上にあるといえる。彼らはアターリャが南アメリカ最大の辰砂の産地に近く、その流通において重要と考えられる地理的な位置を占めていることに注目し、さらに同遺跡がチャビン・デ・ワンタルとの接触を通じて出現した祭祀センターであったと考えられることから、世界システム論を援用して両者の関係を解釈している。この場合、チャビン・デ・ワンタルをはじめとした形成期後期において既に階層化が現れていた社会において、辰砂が威信材または儀礼上重要な物資としてエリート層にとって重要な価値を持つようになったという考察が論の前提となる。そしてその結果、辰砂の採掘と流通のための戦略的な位置にチャビン・カルトを受け入れた祭祀センターが出現したというシナリオである。さらにバーガーとマトスは、北の大祭祀センターとの接触が、現地でのエリート層の出現を導く刺激となったと考えている [ibid. : 173]。

彼らによる世界システム論の援用は、先に述べたようなセトルメント・パターンを中心として1つの地域を閉じたものとして扱う従来の研究の欠点、すなわち地理的に広い範囲にわたる地域間の関係を分析できないという点を打破し、地域間交流を体系的に分析することを意図したものである。学史上、西アジアやメソアメリカの考古学に比べ、アンデス考古学においては世界システム論に関する考察があまり盛んではなかった。その理由は上記のような地域を限定した分析手法が主体となっていたためであり、その欠点を補完しようとしたこの試みは評価されるべきであろう。

ではここで、カンパナユック・ルミとチャビン・デ・ワンタルの関係をバーガーとマトスの論を踏まえた上で考えてみたい。カンパナユック・ルミは、以下に示すように、アターリャと数多くの共通点を有している。

1) 同じ中央高地南部でほぼ同じ気候帯に位置していること。
2) それまで目立ったセンターが存在しない地域において、最初に出現した大規模な祭祀センターであること。
3) チャビン・デ・ワンタルとの接触がその成立に大きく関わっていると考えられること。
4) おそらくほぼ同時期に、汎アンデス的なレベルで重要性が高まった資源の獲得と流通のために重要な地理上の位置に出現したこと。この場合アターリャにおけるワンカベリカ産の辰砂に対応するカンパナユック・ルミの資源はキスピシサ鉱山産の黒曜石 [Burger and Glascock 2000, 2002] となる。

実際に、バーガーとマトスの論からは、アターリャをカンパナユック・ルミに、辰砂を黒曜石に変えてもそのまま成立するという印象を受ける。では世界システム論をカンパナユック・ルミとチャビン・デ・ワンタルの解釈のために援用することは果たして適切であろうか。筆者には、

多くの問題があるように思える。

5–2.　世界システム論の問題点とカンパナユック・ルミの通時的変化

世界システム論を考古学的に援用する際の問題点は多くの考古学者によって議論されてきたが［ex. McGuire 1996; Schortman and Urban 1994; Stein 2002］、その基本的な点は、世界システム論という枠組みが必然的に内包する前提、すなわち分析対象間の関係が非対称であり、なおかつ中央が周縁に変化を引き起こすというある意味で一方向的な論理が適切か否かという点にある。シュライバーが論じているように、世界システム論は本質的に、能動／受動、授与／受容、支配／被支配などあまりに多くの2項対立的な関係を中央／周縁の区分に対応した前提として内包してしまうため、その結果として中央による周縁をコントロールし、社会変化を引き起こす力を過大評価してしまう傾向がある［Schreiber 2005: 239］(註10)。また、周縁と定義された側の主体的な役割を無視してしまう可能性も否定できない。

これらの批判は近年の複雑社会論における歴史的固有性を重視する視点［Pauketat 2001, 2007; Yoffee 1993, 2005］とその問題意識を共有している。この視点は元来、学史上新進化論的な理論モデルが長く支配的であった北米考古学の複雑社会論に対する批判として生まれてきた。新進化主義において前提とされてしまうことの多い発展段階や、漸進的な社会進化のプロセスに対する代替的な社会変化の軌跡（Alternative Trajectory）［McIntosh 1999; Yoffee 1993］を考察することが重要であり(註11)、そのためには分析対象となる社会に固有の歴史的プロセスに目を向けることが必要であるという視点である(註12)。この際に批判の対象となるのは、多くの進化論的な前提を内包する理論モデルがその前提を分析対象に所与のものとして無条件に認めてしまう形で適用されることが多い点、またその理論モデルのなかで使用される用語［ex.首長制国家、国家］が多くの場合その成立に由来する多くのバイアスを含んでいる点である（Pauketat 2007; Yoffee 2005）。考古学における世界システム論の援用は新進化論とは異なる学史上の文脈から始まったが、その適用が厳密な検討なしに中央／周縁の2項対立的な関係を分析対象に外押ししてしまう点、また世界システム論自体が近代以降の資本主義社会を分析することに主眼を置いた論であるにもかかわらず、それを無条件に先史時代の社会に適用してしまいがちな点は、明確に上記の批判と対応している(註13)。

以上を踏まえた上で筆者は、世界システム論に内在する多くの前提をカンパナユック・ルミとチャビン・デ・ワンタルの関係においても認めてしまうことは、両者の関係を理解する妨げとなる可能性があり、それを適切に分析するためには両者の、あるいは両者の関係の歴史的固有性に目を向けるべきであろうと考えている。後述するように、カンパナユック・ルミのデータは、同センターが属する相互作用圏及び、その相互作用圏内での位置付けが時代によって変化したこと、さらにその変化がカンパナユック・ルミの社会経済的変化と結びついていた可能性があることを示唆している。チャビン・デ・ワンタルがそのプロセスに大きく関わっていたことが確実とはいえ、両者の関係を中央／周縁と一方的に定義してしまうことは、その通時的変化の実態を考察する際のバイアスとなる可能性が高いのではないだろうか。また、世界システム論のもう一つの問題点として、社会間の関係を経済的側面のみに焦点を当てることで一元論的に解釈することになりやすい点が挙げられる［Urban and Schortman 1999: 128］。バーガーが論じているように、チャ

ビン現象は、汎地域的な宗教イデオロギーと社会経済的な変動が絡み合った複雑なプロセスである。この場合、カンパナユック・ルミを経済的な意味での周縁と位置づけて世界システム論を援用することは、カンパナユック・ルミ社会がチャビン・カルトをどのように解釈し、受け入れたのかというイデオロギー的側面を単純に、宗教的知識が費用対効果の点で効率の良い交易‘物資’であったため［ex. Stein 1998］とみなすなどの経済一元論的な解釈に還元してしまう危険を孕んでいるのである。

カンパナユック・ルミは、2時期を通じて、チャビン・デ・ワンタルの影響を受け続けていたといえるが、その発現の仕方は大きく異なる。先に述べた通り、カンパナユック1期においては、その建築様式に大きな影響が現れているものの、土器様式にはその傾向が見られない。逆に土器様式は、カンパナユック・ルミがチャビン・デ・ワンタルの影響力が及ぶ範囲、すなわちバーガーの言うところのチャビン相互作用圏［Burger 1993, 2008］の外側に位置する中央高地南部や南海岸の広い範囲と交流があったことを示唆している。この時期においては、黒曜石が大量に出土するものの他の石材も多く使われる。カンパナユック2期においては、建築の改変に大きな影響が見られることに加えて、土器がハナバリウ的土器に変化し、1期に見られたチャビン相互作用圏外の要素を持つ土器が激減する。また黒曜石の石材に占める割合も増加する。また、相対的に社会の階層化を示す遺物が多く出土する。

カンパナユック2期のみを見れば、バーガーとマトスがアターリャに関して示した解釈はカンパナユック・ルミにおいても適用可能なように思える。しかし、世界システム論はカンパナユック1期から2期への通時的変化がなぜ、どのようにして起こったのかを説明することができないのである。逆に、カンパナユック・ルミのデータは、アターリャについての彼らの解釈に対する代替的な可能性を提示しているともいえる。まず、バーガーとマトスはアターリャがチャビン・デ・ワンタルにおけるハナバリウ相に対応する時期に成立したことを前提として世界システム論を援用しているわけだが、この前提自体に検討の余地があるであろう。先にも述べた通り、カンパナユック・ルミにおいてハナバリウ相に対応するのはカンパナユック2期である。しかし、カンパナユック・ルミがU字型の基壇配置を有する大規模な祭祀センターとして出現したのはその前時期、おそらくは形成期中期後半から後期前半に対応すると思われるカンパナユック1期であるため、カンパナユック・ルミはハナバリウ相以前に成立したことになる。これだけ共通点の多く、また距離的にチャビン・デ・ワンタルからより離れているカンパナユック・ルミがハナバリウ相以前に成立している以上、アターリャに関しても彼らの想定より前の時期に出現した可能性がある。また、彼らはアターリャが、チャビン相互作用圏に組み込まれる以前に、両者の間に経済的な結びつきが先行して存在した可能性を指摘しているが［Burger and Matos 2002: 174］、カンパナユック・ルミはその開始から、U字型基壇配置、半地下式方形広場、基壇内の回廊などを有しており、チャビン・デ・ワンタルから少なくとも儀礼空間の使用という点で明確に影響を受けており、経済的な結びつきが宗教イデオロギーより明確に先行、あるいは優先されていたとは考えにくい。アターリャにおいても、その成立の初期から経済的要因と宗教的要因が複雑に絡みあっていた可能性は否定できない。いずれにせよ、結論はアターリャ遺跡の発掘調査によってその歴史が明らかになるのを待たざるをえないであろう。

筆者は、世界システム論をカンパナユック・ルミに援用することは、その歴史的プロセスの複

雑さを無視して「機械的に還元された［Dietler 1998: 297］」シナリオを生み出す罠に陥りかねないと考えている。ディートラーがコロニアル・エンカウンターの考古学における世界システム論の援用に対して発した警告は、カンパナユックやアターリャの事例を考察する際にも有益である。「最終的な段階で現れた非対称な関係あるいは権力構造を、接触後の相互作用ともつれの複雑な歴史の産物としてではなく、接触時の最初の段階での特徴であるとみなすことは、深刻な分析上の誤り［Dietler 1998: 298］」(註14)なのである。

6. おわりに

本稿ではカンパナユック・ルミの調査で得られたデータをもとに、チャビン問題とそれを考察するための理論的枠組みを検討することを試みた。カンパナユック・ルミ出土遺物の分析は現在も途中であり、本論におけるデータの考察はあくまで予備的なものである。そのため今後の分析によっては本稿で提示した解釈も多分に改善の余地があることをお断りしておきたい。本論で強調したように、チャビン問題は基本的な編年に端を発したものであるため、カンパナユック・ルミに関しても、絶対年代データと土器様式および建築の変化を組み合わせた詳細な遺跡編年を確立することが急務であろう。その上で遺跡間の土器、建築及びその他の遺物の様式を地域間レベルで総合的に比較検討していくことが必要である。この点は絶対年代データが出揃った段階を待って別稿で論じることとしたい。

カンパナユック・ルミとチャビン・デ・ワンタル、そしてチャビン相互作用圏の関係は複雑な歴史的プロセスの産物であり、安易に先験的な含意や固定された前提をもつ理論的枠組み（モデル）を適用して説明とみなすことは危険であろう。むしろ筆者は、これらのデータが、先に述べた近年の複雑社会論の動向にあるように、既存の枠組みによって生み出された論に対する代替的な軌跡（alternative trajectories）［McIntosh 1999; Yoffee 1993, 2005］、あるいは、代替的な歴史（alternative histories）［Pauketat 2007］を提示するために有効なのではないかと考えている。

謝辞

2007年から2008年にかけてのカンパナユック・ルミの調査は、Yale University Joseph Albers Fund、Coe Fund、Williams Fundによって行われた。まず、共同研究者であるユリ・カベロ氏の情熱と忍耐に最大限の感謝を表したい。彼の現地での協力なしにこの調査を遂行することはできなかった。また、スペースの都合上各々の名前を挙げることはできないが、調査に参加した国立サンクリストバル・デ・ワマンガ大学の学生達によるフィールドにおける大きな貢献もここに明記しておきたい。イェール大学のリチャード・バーガー教授、埼玉大学の井口欣也准教授には理論面から解釈にいたるまで様々な点で有意義なアドバイスをいただいた。イェール大学大学院のジェイソン・ネスビット、南イリノイ大学大学院の松本剛、埼玉大学非常勤講師の鶴見英成、法政大学非常勤講師の芝田幸一郎の各氏には本論の草稿に目を通していただき、有益な助言をいただいた。また、2人の査読者の方には非常に建設的なコメントをいただいた。謹んで感謝申し上げたい。

註

(註1) アヤクチョでは形成期早期に対応する時期はカチ相（3100–1750B.C.）となるが［MacNeish 1981: 163–164; MacNeish et al. 1975: 35］、この時期には祭祀建築といえるものは発見されていない。遺跡は主にプーナに位置する洞穴、季節キャンプなどであり、定住農耕を開始した可能性のある集落がごくわずかに存在した以外は、牧畜と根菜農耕の組み合わせを生業として季節移動を行っていたと考えられている。続く形成期前期のアンダマルカ相（1750–1250B.C.）においてもこの傾向はあまり変わらなかったようである（MacNeish et al. 1975: 40）。公共的な性格を持つ建築が出現した可能性もあるが、中央海岸の大センター（ex. Burger and Salazar Burger 2008; Shady and Levya 2003）や、コトシュ宗教伝統の祭祀建築（ex. Izumi and Terada 1972）に対応するような大規模なものではなかったと考えられる。

アヤクチョの場合と同様に、プーナにおいては土器の導入後も生業体系、社会組織に大きな変化がなかったというデータは、フニン高原と近接するマンターロ川上流域でも確認されており［Matos 1999; Parsons et al. 2000］、この傾向はアンデス中央高地南部において全体的なものであったと考えられる。バーガーによれば、このデータはフニンをはじめとする中央高地南部において、形成期以前に確立したプーナにおける牧畜中心の生業体系が土器の導入以降も長く続いたことを示している。また彼は、人口支持力の低いプーナへの適応が形成期において他地域において見られたような人口の増加を妨げた可能性を示唆している［Burger 1992: 126–127］。

(註2) 筆者訳。原文は「How and why do relatively egalitarian kin–based communities abandon an organizational form that has proved successful for thousands of years in favor of more complex hierarchical social arrangements？」。

(註3) バーガーによれば、チャビン・デ・ワンタルのハナバリウ相において発見された黒曜石のうち約600 km 南に位置するキスピシサ鉱山産黒曜石の割合は90％を超える（Burger et al 1984）。さらに同鉱山から1000km 以上離れた北高地のセンターであるパコパンパ遺跡、カエホン・デ・ワイラスのワリコト遺跡、中央海岸ルリン谷のカルダル遺跡、ガラガイ遺跡、アヤクチョのウィチカナ遺跡、チュパス遺跡など、数多くの広い範囲にわたる形成期遺跡でキスピシサ鉱山産の黒曜石が出土している［Burger 1992; Burger and Asaro 1977］。それにもかかわらずその遠距離交易の経路は明らかではなかった。

(註4) 2916±55（P–1567）、2860±47（P–1566）の二つの年代（いずれも未補正）がマルカバイェ A 期（Phase A）に対応している［Chavéz 1977: 153–156］。

(註5) 本論では以下の東大調査団によって提唱されている形成期編年［加藤1998］を用いて論を進めていくこととする。すなわち、形成期早期2500–1800B.C.；形成期前期1800–1200B.C.；形成期中期1200–800B.C.；形成期後期800–250B.C.となる。

(註6) シヤコトにおいてはシヤコト・コトシュ期に対応する年代データは存在しないが、近くに位置するコトシュ遺跡のデータはこの時期が形成期中期から後期前半（1200–600 cal. BC.）に位置することを示している［Matsumoto in press; Onuki 1993］。

(註7) この時点では、バーガーの編年は全て未補正の年代値を用いて考察されていた。

(註8) 但し、バーガーは近年の論考において、いくつかの地域においてハナバリウ相以前の段階でチャビン・カルトが受け入れられたとしている［Burger 2008: 699］。

(註9) 筆者訳。原文は「the creation of a mosaic, syncretism, or the reformulation of cultures that came into contact」。

(註10) 但し、バーガーとマトス［Burger and Matos 2002］のように、特定の場合における（この場合アターリャとチャビン・デ・ワンタルの関係）この前提の正当性を考古学資料によって吟味したうえで、なおかつ世界システム論の援用が適切であると結論付けている例もある。

(註11) 筆者は、このような視点は、Pauketat が Historical Processualism と名づけているものに含まれると考える［Pauketat 2001］。

（註12） この場合の批判の対象としては、サーヴィスによるバンド、部族、首長制社会、国家の発展段階論［Service 1962］、ビンフォードやフラナリーによるシステム論［ex. Flannery 1968, 1972］、カーネイロ等の原動力（prime mover）モデル［ex. Carneiro 1970］、さらにそれらを源流とする近年の論考［ex. Billman 1996, 1999; Johnson and Earle 1987; DeMarris et al. 1996］などが挙げられる。

（註13） 但し、世界システム論が有効だと考える考古学者の多くはこれらの問題点に対して自覚的であり、世界システム論に対して様々な変更を加えてきた［ex. Kardulias and Hall 2008］。筆者が重要な参照点としてここで言及しているBurger and Matos 2002に関してもこの点は同様であり、ウォーラーステインの世界システム論の援用というよりは、それが考古学者によって再解釈されたことで生まれた中央／周縁（core-periphery）の非対称関係に分析の重点を置く視点を、チャビン・デ・ワンタルとアターリャの関係を解釈するための枠組みとして用いたと述べている［Burger and Matos 2002: 177］。ただ本稿における筆者の立場は、この中央／周縁の枠組み自体が世界システム論の重要な部分であり、その非対称関係を前提とした論自体に対する危険性を指摘するというものであるため、あえてここでは両者を区別していない。

（註14） 筆者訳。原文は「it is a serious analytical error to assume that asymetrical relations or structures of power that ultimately appeared in later periods were nacessarily a feature of the first stages of the encounter rather than a product of a subsequent complex history of interaction and entanglement.」。

参考文献

Becker, B. and B. Kromer.

1993 The Continental Tree-ring Record-Absolute Chronology, C14 Calibration and Climate Change at 11 ka. *Paleogeography, Paleoclimatology, Paleoecology* 103: 67–71.

Billman, B. R.

1996 *The Evolution of Prehistoric Organizations in the Moche Valley, Peru*. Ph.D. dissertation, University of California, Santa Barbara. University Microfilms, Ann Arbor.

1999 Reconstructing Prehistoric Political Economies and Cycles of Political Power in the Moche Valley, Peru. In *Settlement Pattern Studies in the Americas*: *Fifty Years Since Virú*, edited by B. R. Billman and G. M. Feinman, pp.131–159. Smithsonian Institution Press, Washington, DC.

Blanton, R. E. and G. M. Feinman.

1984 The Mesoamerican World-System. *American Anthropologist* 86: 673–682.

Browman, D. L.

1970 *Early Peruvian Peasants*: *The Culture of a Central Highland Valley*. Unpublished Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, Harvard University.

Burger, R. L.

1981 The Radiocarbon Evidence for the Temporal Priority of Chavín de Huántar. *American Antiquity* 46: 592–602.

1984 *The Prehistoric Occupation of Chavín de Huántar, Peru*. University of California Publications in Anthropology 14. University of California Press, Berkeley.

1988 Unity and Heterogeneity within the Chavín Horizon. In *Peruvian Prehistory*, edited by R. W, Keating, pp.99–144. Cambridge University Press, Cambridge.

1992 *Chavin and the Origins of Andean Civilization*. Thames and Hudson, New York

1993 The Chavín Horizon: Stylistic Chimera or Socioeconomic Metamorphosis? In *Latin American Horizons*, edited by Donald Rice, pp.41–82. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

2008 Chavín de Huántar and Its Sphere of Influence. In *Handbook of South American Archaeology,* edited by H. Silverman and W. Isbell. Springer, New York.

n.d *Chavín de Huántar Redux*: *Different Visions of the Janabarriu Phase Occupation*. Unpublished manuscript on

the possession of the author.

Burger, R. L. and F. Asaro.

1977 *Trace Element Analysis of Obsidian Artifacts from the Andes: New Perspectives on Pre-Hispanic Economic Interaction in Peru and Bolivia*. Lawrence Berkeley Laboratory, Berkeley.

Burger, R. L. and M. D. Glascock

2000 Locating the Quispisisa Obsidian Source in the Department of Ayacucho, Peru. *Latin American Antiquity* 11 (3):258–268.

2002 Tracking the source of Quispisisa Type Obsidian from Huancavelica to Ayacucho. In *Andean Archaeology I. Variations in Sociopolitical Organization*, edited by W. Isbell and H. Silverman, pp. 341–368, Kluwer Academic/Plenum Publishers, New York.

Burger, R. L. and R. M. Matos.

2002 Atalla: A Center on the Periphery of the Chavín Horizon. *Latin American Antiquity,* 13(2):153–177.

Burger, R. L. and L. Salazar-Burger.

1991 The Second Season of Investigations at the Initial Period Center of Cardal, Peru. *Journal of Field Archaeology* 18(3):275–296.

2008 The Manchay Culture and the Coastal Inspiration for Highland Chavín Civilization. In *Chavín: Art, Architecture and Culture,* edited by W. Conklin and J. Quilter, pp. 85–106. Cotsen Institute of Archaeology Monographs Contributions in Field Research and Current Issues in Archaeological Method and Theory 61, Cotsen Institute of Archaeology at UCLA, Los Angels.

2009 Investigación Arqueológicas en Mina Perdida, Valle de Lurín. In *Arqueología del Periodo Formativo en la Cuenca Baja de Lurín*, edited by R, Burger. and K. Makowski, pp.37–58. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

Caldwell, J. R.

1964 Interaction Spheres in Prehistory. In *Hopewellian Studies*, edited by J.R. Caldwell and R.L. Hall. Illinois State Museum Scientific Papers 12(6):135–43.

Carneiro, R. L.

1970 A Theory of the Origin of the State. *Science* 169(21):733–8.

Chase-Dunn, C. and T. D. Hall.

1997 *Rise and Demise: Comparing World-Systems*. Westview Press, Boulder.

Chávez, K. L. Mohr.

1977 *Marcavalle: The Ceramics from an Early Horizon Site in the Valley of Cuzco, Peru, and Implications for South Highland Socio-economic Interaction*. Ph.D Dissertation, Department of Anthropology, University of Pennsylvania, University Microfilms, Ann Arbor.

Cusick, J. M. (ed.).

1998 *Studies in Culture Contact: Interaction, Culture Change, and Archaeology*. Center for Archaeological Investigations, Occasional Papers No. 25. Southern Illinois University Press, Carbondale.

DeMarrais, E., L. J. Castillo, and T. Earle

1996 Materialization, Ideology, and Power Strategies. *Current Anthropology* 37, vol.1. pp.15–86.

Dietler, M.

1998 Consumption, Agency, and Cultural Entanglement: Theoretical Implications of a Mediterranean Colonial Encounter. In *Studies in Culture Contact: Interaction, Culture Change and Archaeology,* edited by J.G. Cusick, pp. 288–315. Center for Archaeological Investigations, Occasional Papers No. 25. Southern Illinois University Press, Carbondale.

Elera C.

1993 El Complejo Cultural Cupisnique: Antecedentes y Desarrollo de su Ideología Religiosa. In *El Mundo Ceremo-*

nial Andino: *Senri Ethnological Studies 37*, edited by L. Millones and Y. Onuki, pp. 225–252. National Museum of Ethnology, Osaka.

1998 *The Puemape Site and the Cupisnique Culture*: *A Case Study on the Origin and Development of Complex Society in the Central Andes, Peru*. Ph.D Dissertation, University of Calgary, University Microfilms, Ann Arbor.

Flannery, K. V.

1968 Archaeological Systems Theory and Early Mesoamerica. In *Anthropological Archaeology in the Americas*, edited by B. J. Meggers, pp. 67–87. Anthropological Society of Washington, Washington.

1972 The Cultural Evolution of Civilizations. *Annual Review of Ecology and Systematics* 3:399–426.

Gonzales Carré, E., E. T. Carrasco, V. Galdo, and J. Levano.

1981 *La Ciudad Inca de Vilcashuamán*. Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga, Ayacucho.

Gonzales Carré, E., J. R. Ceruti, and J. L. Peña.

1997 *Ayacucho*: *San Juan de la Frontera de Huamanga*. Banco de Crédito del Perú, Lima.

Grieder, T., A. M. Bueno, C. E. Smith Jr. and R. M. Malina.

1988 *La Galgada, Peru*: *A Preceramic Culture in Transition*. University of Texas Press, Austin.

Grossman, J. W.

1972 *Early Ceramic Cultures of Andahuaylas, Aprimac, Peru*. Unpublished Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, University of California, Berkeley.

1983 Demographic Change and Economic Transformation in the South-central Highlands of Pre-Huari Peru. *Ñawpa Pacha* 21:45–126.

Guzmán Ladrón de Guevara, C.

1959 *Proyecto de Exploración del Sitio Arqueológico de Willca Waman*. *Dpto*. *de Ayacucho*. B.A. Tesis. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

Haas, J. and W. Creamer.

2006 Crucible of Andean Civilization: The Peruvian Coast from 3000 to 1800 BC. *Current Anthropology* 47(5):745–775.

Izumi S., P. Cuculiza and C. Kano.

1972 *Excavations at Shillacoto*. *Huánuco, Peru*. The University Museum Bulletin no.3, University of Tokyo Press, Tokyo.

Izumi, S. and K. Terada.

1972 *Andes 4*: *Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. The University of Tokyo Press, Tokyo.

Johnson, A. and T. Earle.

1987 *The Evolution of Human Societies*: *From Foraging Group to Agrarian State*. Stanford University Press, Stanford.

Kardulias, P. N. and T. D. Hall.

2008 Archaeology and World-systems Analysis. *World Archaeology* 40(4):572–583.

加藤泰建

1998 「序章　アンデス文明の起源を求めて」『文明の創造力－古代アンデスの神殿と社会－』加藤泰建・関雄二編，角川書店，pp. 7–42，東京.

Kembel, S. R.

2001 *Architectural Sequence and Chronology at Chavín de Huántar, Peru*. Ph.D Dissertation, Stanford University, University Microfilms, Ann Arbor.

2008 The Architecture at the Monumental Center of Chavín de Huántar: Sequence, Transformations, and Chronology. In *Chavín*: *Art, Architecture and Culture,* edited by W. Conklin and J. Quilter, pp. 35–81. Cotsen Institute of Archaeology Monographs Contributions in Field Research and Current Issues in Archaeological Method and Theory 61, Cotsen Institute of Archaeology at UCLA, Los Angels.

Kembel, S. R. and J. W. Rick.

2004 Building Authority at Chavín de Huántar. In *Andean Archaeology*, edited by H. Silverman, pp 51–75. Blackwell Publishing, Malden.

Kohl, P. L.

1987 The Use and Abuse of World Systems Theory: the Case of the 'Pristine' West Asian State. In *Advances in Archeological Method and Theory* 11:1–35.

2008 Shared Social Fields: Evolutionary Convergence in Prehistory and Contemporary Practice. *American Anthropologist* 110(4):495–506.

Larco Hoyle, R.

1941 *Los Cupisniques*. Casa Editora La Crónica y Variedades, Lima.

Lathrap, D. W.

1973 Gifts of the Cayman: Some Thoughts on the Subsistence Basis of Chavín. In *Variations in Anthropology*, edited by D. Lathrap and J. Douglas, pp. 91–105. Illinois Archaeological Survey, Urbana.

León, C. E.

2007 Radiocarbono y Calibración: Potencialidades para la arqueología andina. *Arqueología y Sociedad* 17: 67–89.

Lumbreras, L. G.

1993 Chavín de Huántar. Excavaciones en la Galería de las Ofrendas. *Materiálen zur Allgemeinen und Vergleichenden Archaölogie*, Band 51, Kava, Phillip von Zabern, Mainz am Rheim.

MacNeish, R. S.

1981 Seasonality of the Components. In *Prehistory of the Ayacucho Basin, Peru, Volume* Ⅱ*:Excavations and Chronology,* pp. 149–166. The University of Michigan Press, Ann Arbor.

MacNeish, R. S., A. G. Cook, L. G. Lumbreras, R. K. Vierra, and A.Nelkin-Terner.

1981 *Prehistory of the Ayacucho Basin, Peru, Volume* Ⅱ*:Excavations and Chronology*. The University of Michigan Press, Ann Arbor.

MacNeish, R. S., T. C. Patterson, and D. L. Browman.

1975 *The Central Peruvian Prehistoric Interaction Sphere*. Papers of the Robert S. Peabody Foundation for Archaeology, vol. 7. Robert S. Peobody Foundation for Archaeology, Phillips Academy, Andover.

Matos, R. M.

1968 A Formative-Period Painted Pottery Complex at Ancón, Perú. *American Antiquity* 33(2):226–232.

1999 El Período Formativo en el Altiplano de Junín, Perú. In *Formativo Sudamericano,* edited by Paulina Ledergerber-Crespo, pp. 180–200. Ediciones Abya-Yala, Quito.

Matsumoto, Y.

in press. Reconsideración de la Cronología Radiocarbónica del Período Formativo en la Cuenca de Alto Huallaga. *Homenaje al 50 Aniversario de la Misión Japonesa a los Andes,* edited by M. Amat. Univsidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

Matsumoto, Y. and Y. Cavero.

2008 *Campanayuq Rumi*: *Un Centro Ceremonial en Forma de «U» en Vilcashuamán, Ayacucho, Sierra Centro-sur*. Paper presented at VI Simposio Internacional de Arqueología PUCP: El Período Formativo: Enfoques y Evidencias Recientes. Cincuenta Años de la Misión Arqueológica Japonesa y su Vigencia, September 5th–7th, Lima.

2009 *Campanayuq Rumi*: *Perspectives on the Southern Frontier of the Chavín Sphere of Interaction*. Paper presented at 37th Annual Midwest Conference on Andean and Amazonian Archaeology and Ethnohistory, March 21st – 22nd, Ann Arbor.

McGuire, R. H.

1996 The Limits of World-Systems Theory for the Study of Prehistory. In *Pre-Columbian World-Systems*, edited by

Peter N. Peregrine and Gary M. Feinman, pp. 51–64. Madison: Prehistory Press.

McIntosh, S. K. (ed.).

1999 *Beyond Chiefdoms: Pathways to Complexity in Africa*. Cambridge University Press, Cambridge.

Menzel, D., J. H. Rowe, and L. E. Dawson.

1964 The Paracas Pottery of Ica: A Study in Style and Time. *University of California Publications in American Archaeology and Ethnology* 50. University of California Press, Berkeley.

Mesía, C.

2007 *Intersite Spatial Organization at Chavín de Huántar during the Andean Formative: Three Dimensional Modeling, Stratigraphy and Ceramics*. Ph.D Dissertation, Stanford University, University Microfilms, Ann Arbor.

Ochatoma, J. A.

1985a *Jargam Pata de Huamanga: Investigaciones Archaeólogicas en un Yacimiento Correspondiente al Horizonte Temprano*. Unpublished BA thesis, Facultad de Ciencias Sociales, Universidad Nacional de San Cristobal de Huamanga, Ayacucho.

1985b *Acerca del Formativo en la Sierra Centro-Sur*. Unpublished thesis de Licenciado, Facultad de Ciencias Sociales, Universidad Nacional de San Cristobal de Huamanga, Ayacucho.

1992 Acerca del Formativo en Ayacucho. In *Estudios de Arqueología Peruana*, edited by D. Bonavia, pp. 193–213. FOMCIENCIAS, Lima.

1998 El período formativo en Ayacucho; Balances y perspectivas. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 79–114.

Onuki, Y.

1993 Las Actividades Ceremoniales Tempranas en la Cuenca del Alto Huallaga y Algunos Problemas Generales. In *El Mundo Ceremonial Andino (Senri Ethnological Studies 37)*, edited by L. Millones and Y. Onuki, pp69–96. National Museum of Ethnology, Osaka.

Parkinson, W. A. and M. L. Galaty.

2007 Secondary States in Perspective: An Integrated Approach to State Formation in the Prehistoric Aegean. *American Anthropologist* 109(1):113–129.

Parsons, J. R., and C. M. Hastings, and M. Ramiro Matos.

2000 *Prehispanic Settlement Patterns in the Upper Mantaro and Tarma Drainages, Junín, Perú, vol.1, The Tarma-Chinchaycocha Region*. Memories of the Museum of Anthropology No.34. University of Michigan, Ann Arbor.

Pauketat, T. R.

2001 Practice and History in Archaeology: an Emerging Paradigm. *Anthropological Theory* 1: 73–98.

2007 *Chiefdoms and Other Archaeological Delusions*. Alta Mira Press, Lanham.

Peregrine, P. N.

1991 Prehistoric Chiefdoms on the American Midcontinent: A World-System Based on Prestige Goods. In *Core/Periphery Relations in Precapitalist Worlds,* edited by C. Chase-Dunn and T.D. Hall, pp.193–211. Westview Press, Boulder.

Pitts, M.

2008 Globalizing the Local in Roman Britain: An Anthropological Approach to Social Change. *Journal of Anthropological Archaeology* 27: 493–506.

Pozorski, S. and T. Pozorski .

1987 *Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*. University of Iowa Press, Iowa City.

2002 The Sechin Alto Complex and its Place within Casma Valley: Initial Period Development. In *Andean Archaeology I: Variations in Sociopolitical Organization*, edited by Isbell, W. H. and H. Silverman. Springer, New York.

Price, B.

1978 Secondary State Formation: An Explanatory Model. In *Origins of the State: The Anthropology of Political Evolution*, edited by R. Cohen, pp. 161–224. Institute for the Study of Human Issues, Philadelphia.

Ravines, R.

1969–1970 El Sitio Arqueológico de Chuncuimarca, Huancavelica. *Revista del Museo Nacional* 36:234–257.

Reindel, M and J. Isla.

2008 Evidencias de Culturas Tempranas en los Valle de Palpa, Costa Sur del Peru. *Boletín de Arqueología PUCP* 10:237–283.

Renfrew, C.

1986 Introduction: Peer Polity Interaction and Socio-political Change. In *Peer Polity Interaction and Socio-political Change*, ed. C. Renfrew and J. F. Cherry, pp. 1–18. Cambridge University Press, Cambridge.

Rick, J. W.

2005 The Evolution of Authority and Power at Chavín de Huántar, Peru. In *Foundations of Power in the Prehispanic Andes*, edited by Vaughn K., D. Ogburn and C. Conlee. Archaeological Papers of the American Anthropological Association 14: 71–89.

2008 Context, Construction, and Ritual in the Development of Authority at Chavín de Huántar. In *Chavín: Art, Architecture and Culture,* edited by W. Conklin and J. Quilter, pp. 3–34. Cotsen Institute of Archaeology Monographs Contributions in Field Research and Current Issues in Archaeological Method and Theory 61, Cotsen Institute of Archaeology at UCLA, Los Angels.

Riddel, F. A. and L. M. Valdez.

1987–1988 HACHA y La Occupación Temprana del Valle de Acari. *Gaceta Arqueologica Andina* 16: 6–10.

Robinson, R. W.

1994 Recent Excavations at Hacha in the Acari Valley, Peru. Andean Past 4: 9–37.

Roe, P.

1982 *The Cosmic Zygote: Cosmology in the Amazon Basin*. Rutgers University Press, New Bruswick.

Rosas La Noire, H.

2007 *La Secuencia Cultural del Período Formativo en Ancón*. Avqi Ediciones, Lima.

Scaramelli, F. and K. Tarble de Scaramelli.

2005 The Roles of Material Culture in the Colonization of the Orinoco, Venezuela. *Journal of Social Archaeology* 5 (1):135–168.

Schneider, J.

1977 Was There a Pre-capitalist World-system? *Peasant Studies* 6:20–29.

Schortman, E. M. and P. A. Urban.

1994 Living on the Edge: Core/Periphery Relations in Ancient Southeastern Mesoamerica. *Current Anthropology* 35: 401–430.

Schreiber, K.

2005 Imperial Agendas and Local Agency: Wari Colonial Strategies. In *Archaeology of Colonial Encounters*, edited by G.J. Stein, pp.237–261. School of American Research Press, Santa Fe.

Service, E. R.

1962 *Primitive Social Organization*. Random House, New York.

Shady, R. and C. Levya. (eds.)

2003 *La Ciudad Sagrada de Caral-Supe: Los Origenes de la Civilización Andina y la Formación del Estado Prístimo en el Antiguo Perú*. Instituto Nacional de Cultura, Lima.

Silverman, H.

2009 Comparaciones y Contrastes entre la Costa Sur y la Costa Central del Perú durante el Periodo Formativo. In *Arqueología del Periodo Formativo en la Cuenca Baja de Lurín*, edited by R, Burger. and K. Makowski, pp.429–490. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

Spicer, E.

1961 Types of Contact and Process of Change. In *Perspectives in American Indian Culture Change*, edited by E. Spicer, pp. 517–544. University of Chicago Press, Chicago.

Stein, G. J.

1998 World System Theory and Alternative Modes of Interaction in the Archaeology of Culture Contact. In *Studies in Culture Contact: Interaction, Culture Change and Archaeology,* edited by J.G. Cusick, pp. 220–255. Center for Archaeological Investigations, Occasional Paper No.25. Southern Illinois University Press, Carbondale.

2002 From Passive Periphery to Active Agents: Emerging Perspectives in the Archaeology of Interregional Interaction. *American Anthropologist* 104(3):903–916.

Tello, J. C.

1943 Discovery of the Chavin Culture in Peru. *American Antiquity* 6: 135–160.

1960 *Chavin: Cultura Matriz de la Civilizatión Andina*. Imprenta de la Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

Urban, P. A. and E. M. Schortman.

1999 Thoughts on the Periphery: The Ideological Consequences of Core/Periphery Relations. In *World-Systems Theory in Practice. Leadership, Production, and Exchange,* edited by P. N. Kardulias, pp.125–152. Rowman and Littlefield Publishers, New York.

Van der Plicht, J.

2004 Radiocarbon, the Calibration Curve and Scythian Chronology. In *Impact of the Environment on Human Migration in Eurasia: Proceedings of the Nato Advanced Research Workshop, Held in St. Petersburg, 15–18 November 20*, edited by E.M. Scott, A.Y. Alekseev, and G. Zaitseva, pp45–61. Springer, New York.

Wolf, E. R. 1984. Culture: Panacea or Problem? *American Antiquity* 49(2):393–400.

Wallerstein, I.

1974 *The Modern World System I. Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*. Academic Press, New York.

1993 World Systems versus World System: A Critique. In *The World System: Five Hundred Years or Five Thousand?* Edited by A.G. Frank and B.K. Gills, pp. 292–296. Routledge, London.

Wilson, D. J.

1988 *Prehipanic Settlement Patterns in the Lower Santa Valley, Peru: A Regional Perspective on the Origin and Development of Complex North Coast Society*. Smithsonian Institution Press, Washington D.C.

Yoffee, N.

1993 Too Many Chiefs ? (or Safe Texts for the '90s).In *Archaeological Theory: Who Sets the Agenda?* edited by N. Yoffee and A. Sherratt, pp. 60–78. Cambridge University Press, Cambridge.

2005 *Myths of the Archaic State: Evolution of the Earliest Cities, States, and Civilizations*. Cambridge University Press, Cambridge.

Campanayuq Rumi and the Chavín Problem

—Perspectives from the Periphery of the Chavín Sphere of Interaction—

Yuichi Matsumoto
(Yale University)

Key words: Campanayuq Rumi, Chavín Problem, inter-regional interaction, complex societies, world systems approach

Campanayuq Rumi is a Formative Period ceremonial center located in Vilcashuaman, Department of Ayacucho, Peru. From 2007–2008, I conducted two field seasons of archaeological investigations at the site in collaboration with Yuri Cavero. These excavations revealed that Campanayuq Rumi was one of the most important ceremonial centers in the south central highlands of Peru during the Formative Period. The preliminary analysis of the materials obtained from the research suggests that Campanayuq Rumi appeared as a large ceremonial center under the strong influence of Chavín de Huántar located 600km to the north and functioned as a regional node in the Chavín sphere of interaction.

While large ceremonial centers and social stratification emerged during this period along the coast and northern highlands, the south central highlands had been regarded as a cultural 'backwater' because of the apparent absence of large civic-ceremonial centers. However, the results of the excavations at Campanayuq Rumi suggest the necessity to radically alter this position. The new evidence indicates that Campanayuq Rumi probably emerged as the first complex society of the region through the interaction with a more complex society centered at Chavín de Huántar and collapsed in accordance with its decline.

Campanayuq Rumi is a ceremonial center with a 'U-shaped' architectural layout that is open to the northwest and composed of a semi-subterranean rectangular plaza that is surrounded by 4 platforms. The site history can be divided into two phases based on the transformations in architecture and associated pottery styles. The earlier phase, named Campanayuq 1, probably belongs to the Middle Formative Period. Although a basic U-shape layout for the public architecture similar to Chavín de Huántar was built in this phase, the ceramic style does not show much similarity to that of Chavín de Huántar; instead it suggests interaction with much of the south-central highlands and coast. The later phase, Campanayuq 2, belongs to the Late Formative Period. Some architectural additions were made using finely cut and polished stones similar to Chavín de Huántar. The pottery style changed radically, exhibiting strong ties with Janabarriu phase pottery at Chavín de Huántar and the south coast Early Ocucaje style.

The unusual amount and quality of obsidian artifacts from Campanayuq Rumi suggests its role in the collection and distribution of obsidian. This argument is supported by its location close to the most important obsidian source exploited during the Formative Period in the Central Andes called Quispisisa, which is located about 100km southwest of Vilcashuaman.

These new data from Campanayuq Rumi will contribute to the ongoing debate over the 'Chavín Problem' between Richard Burger and John Rick. According to Burger, Chavín de Huántar appeared as a major ceremonial center around 1000 cal. B.C. by combining several elements of the Early and Middle Formative ceremonial centers of the coast and highlands as a 'source of inspiration'. Burger further argues that during the Janabarriu Phase (700–300 cal. B.C.), the religious ideology of Chavín de Huántar was expanded at a pan-Andean level associated with several socioeconomic transformations. In accordance with the emergence of the religious network, interregional exchange of exotic goods such as obsidian from the Quispisisa source intensified. In contrast, Rick argued that the history of Chavín de Huántar began between 1500–1200 cal. B.C. Moreover, in contrast to Burger, Rick argues that the final monumental stage at Chavín de Huántar occured between 900–780 cal. B.C., and the date of 500 cal. B.C. corresponds to the physical collapse of Chavín de Huántar.

In Rick's view, many Middle and Late Formative Period centers appeared at the same time as Chavín de Huántar. However, it seems clear that Campanayuq Rumi emerged under the strong influence of Chavín de Huántar. On the other hand, the appearance of Campanayuq Rumi was clearly before the Janabarriu Phase. Absolute dates of Campanayuq Rumi will contribute to solve this problem in the future.

A world systems approach has been preferred to explain spatially distant societies connected by economic linkage such as Campanayuq Rumi and Chavín de Huántar because this perspective makes it possible for archaeologists to understand the interaction between the core society with marked social stratification and the peripheral ones from the perspective of the core elites' interest. However, it seems impossible to explain the diachronic socioeconomic transformation from Campanayuq 1 phase to Campanayuq 2 phase using world systems approach. Rather than being limited by the term 'world systems', the data of Campanayuq Rumi seems to provide a good opportunity to consider alternative histories or alternative trajectories to the ones constructed by the present theory of complex society and interaction.

原稿受領日　2009年6月 2日
原稿採択日　2009年9月29日